創星

SOUSEI

Vol.17

Take Free

創星

Vol.17

目次

CONTENTS

創星
Vol.17

メモワール	長月絵莉	3
あけ抜けない空に	甲斐聖子	5
獅子座	松田定幸	１０
クラシック教養のお時間	天沼太郎	１１
金田一の海苔巻き	間々えいよ	１３
君の空を飛びたい	紫雲夜想	１５
ナツノメ	詠人不知	２１
衣空の映画放談	衣空	２３
クラシック教養のお時間　番外編	天沼太郎	２８
タンカトイラスト	松田定幸	３１
大っ嫌いな香菜へ	間々えいよ	３５
丘と少年　――神さまへの捧げもの	川口修治	３７
ブロークンメモリーズ	一路真実	４２
編集後記		５０

星屑書房
STARDUST BOOKS

フリーペーパー『創星』のバックナンバーはwebで読めます。
お問合せは、ホームページもしくはメールでどうぞ！
https://stardustbooks.jimdo.com/
stardustbooks.create@gmail.com

メモワール

長月　絵莉

1

一日のうちで晴れやかな気分になったり、鬱々とした気分になったり。説明のつかないそれは、もう生まれ持った性格なのだろう。だけど一度でいいから、皆の言う「普通」を知ってみたいものだ。

2

同じ屋根の下で暮らしていたときは、親の一挙一動が時に疎ましく、口汚いののしり合いになることが少なくなかった。家を出て、帰省をするたびに小さくなっていく親の姿を目にする。きっとあの頃は、どちらも必死だった。今はその頃を取り戻したい。

3

失敗も間違いも、どれだけしてしまってもいい。またやりなおそう、頑張ろうと思う気持ちがあればそこからスタートだ。だけど、どんな失敗からも何か一つは学ぶことを忘れずに。

4

もし自分の大切な人が誰にも言えないような秘密を持っていたら、あなたは誰にも言わないと誓うことはできますか。
もしそれが裁かれるべきことであっても、あなたは見て見ぬふりをできますか。

彼女にはそれができなかった。
愛しているなら、見て見ぬふりをしていればよかったのか。
見て見ぬふりをすることが愛だとは思えなかった。
彼は彼女を恨んだ。「お前だけは信じていたのに」
周囲はよくやったと晴れやかに言った。「あんなやつはいるべきではない」

彼女は今でも苛まれている。
見て見ぬふりをすることも出来たかもしれないのに。
だけど恋人が、人でなくなるさまはつらかった。

「もう、人間やめたいわ」何日かぶりの彼の声。
異臭漂う部屋の中でその言葉を聞いた。
「ごめんな。二度としない。約束するよ」
その言葉を何度も信じた。何度も、何度も。

同じ繰り返しだった。
いつも同じだった。

彼は彼女を許さないだろう。

彼女は今でも苛まれている。

甲斐聖子（かいしょうこ）

「あけ抜けない空に」1

いじめられた傷
傷跡が物語る闇
闇に込められた
憎悪
傍受
破壊
心に秘められし
いじめられた時

「あけ抜けない空に」 2

打てば響いていく
食べると太る体質
祖母の事が好きで
手作りを頬張って
罵声が降ってきて
打てば響く体質は
嫌う方向を間違え
いじめの海に溺れ
大好きな祖母の顔
涙で壊して埋めた

「ピンク色の雲」番外編・「あなたへ」

いじめられたことはありますか？

いじめをしたことはありますか？

いじめをいつもみていましたか？

気づいてほしいのは、読んでほしいのは、これらにあてはまる人みんな。

つまり、あなた。

生きている今、息をしている今日、過去に経験した出来事、チャラにしていい事、チャラにしてはいけない事、わかっているあなた。どうか、間違った道に行かないで。

どうか、やってはいけない事だけはやらないままでいて。

そして、生きて。

生きてという言葉を書くのも言うのも簡単だと、思い込まないで。自分だけが辛かったと思わないで。

今、もし笑えているのならそれでよくて、まだ、笑えていないのなら、けれども、それでいい。

「今」あなたがこの文字に触れている、それが私にとっての自己満足。

私は、自己満足の中を生きていくと決めて、生きている。

あなたは？

生きよう、私は知恵というものはとても薄く、それでも文字を書いている。

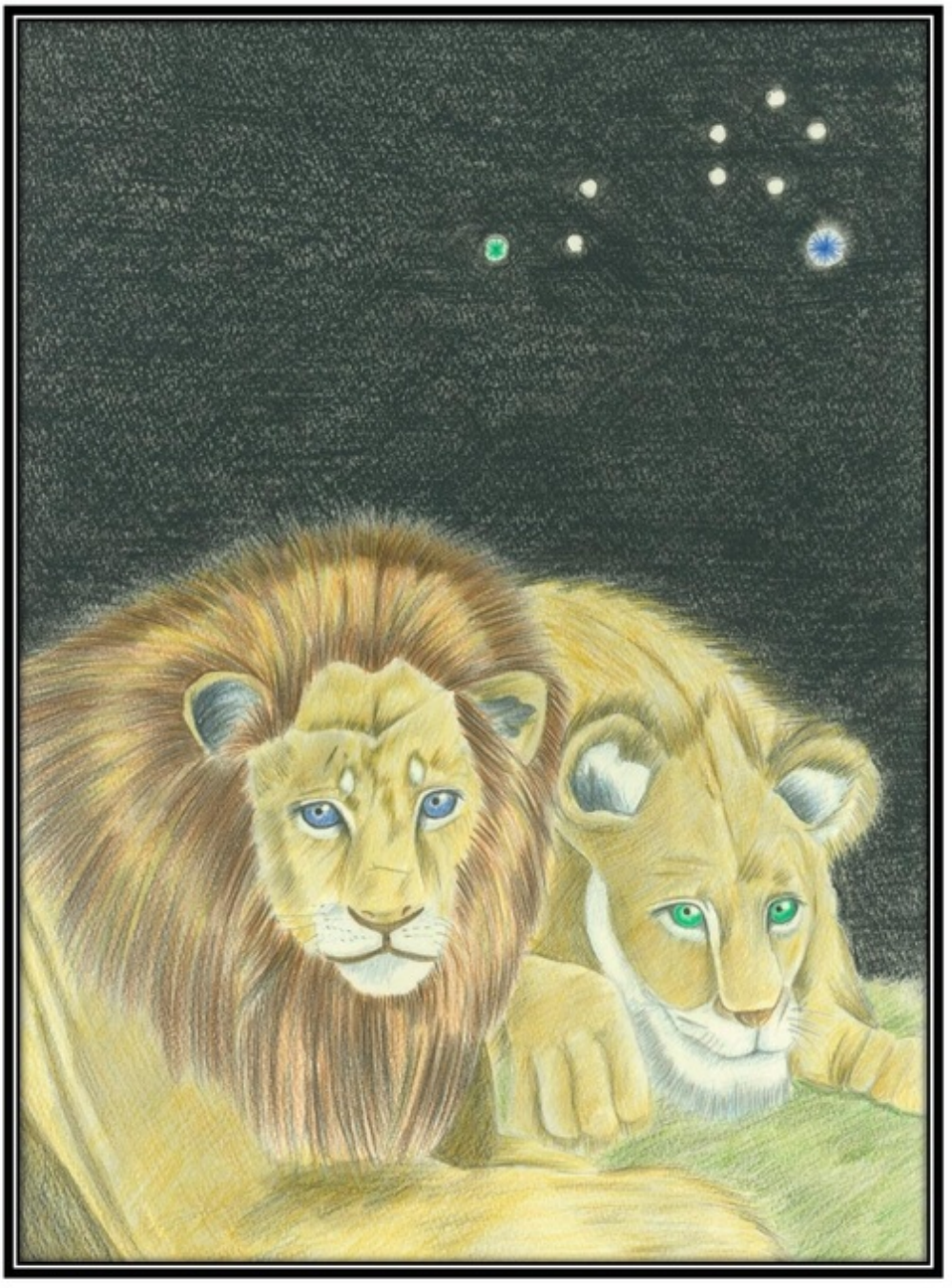
あなたが見てくれたらいいなと、思っているから、力が持つまで続けていきたい。

Twitter@mgabcde

感想などいただけたら嬉しいです。

※「ピンク色の雲」

詩集として本にしていますので、気になった方はお気軽にお声をおかけください。



— L e o —

クラシック音楽教養のお時間

天沼　太郎

連載　第15回　ベートーヴェン、孤独のその先

わずかにのぞいた光は一瞬にして炎となり、命を持つかのように立ちのぼる。ぐんぐんと勢いを増した炎は遙か天に昇り、弾け、ホールを揺らす。舞台にいるのは、しかし、小柄な女性が一人だけ。さっき見えたものは、一体何の幻だろうか。

☆今回取り上げる演奏会

マリア・ジョアン・ピリス　ピアノ演奏会

演奏曲目
（1）　ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第8番　ハ短調　Op.13　「悲愴」
（2）　ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第17番　ニ短調　Op.31-2　「テンペスト」
（3）　ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第32番　ハ短調　Op.111
演奏会日時：　2018年4月12日(木)
会場：　サントリーホール（東京）

マリア・ジョアン・ピリス*が本年をもって引退する。その最後の日本ツアーがこの4月に行われた。ソロ、デュオ、そして協奏曲、さらに追加公演まで行われる。この月はまさに、ピリスの月となった。

＊マリア・ジョアン・ピリス：（1944年-）ポルトガル出身のピアニスト。デビュー当時は「ポルトガルの天才少女」として売り出す。現在はブラジルで自然に囲まれた生活をしているという。

私が初めてピリスの演奏を聴いたのは2002年。九州交響楽団にソリストとして登場し、ショパンのピアノ協奏曲と、アンコールに同じくショパンの子守歌を演奏した。座った席が悪かったかのか、それ以外に問題があったか、残念ながら、何の感銘も受けない演奏会だった。

ピリスは本当にいい演奏家なのだろうか？「ポルトガルの天才少女」は、大人になってただのピアニストになってしまったのではなかろうか？

一つだけ気になったのが、ショパンを弾き終わったの後のピリスの無心な笑顔である。わざとらしさ皆無のあの笑顔がなかったら、「金返せ！」ではないけど、ピリスに対し悪いイメージを持ったと思う。あの表情があったからこそ、自分が何か大事なものを彼女の演奏から聞き落としたような気がして、私にとって彼女は、もう一度聴かねばならない音楽家の一人となっていた。

そんな彼女の最後の来日公演が、この4月に行われる。もしかしたら、あの時分からなかった天才の片鱗を体験できるかもしれない。しかも、プログラムの最後は、私の大好きなベートーヴェンのピアノ・ソナタ第32番である。時間的に難しい平日であったけど(会社からサントリーホールまで遠いのだ)、チケットを手配した。

さて、演奏会当日である。首尾良く余裕を持ってサントリーホールに辿り着き、プログラム最初の「悲愴」ソナタ、その冒頭から、いきなり心をしっかり掴まれた。最初のメロディが鳴ってから、次のフレーズが始まるまでの沈黙である。あの無音状態があって初めて、この曲が並の悲劇でないことが理解できた。それこそ、ベートーヴェンの例えようもない孤独が伝わって来たのだ。冒頭のメロディ

(第 1 主題)に台詞を充てるなら、「誰か、私の声が聞こえる方はいませんか？　私のことを分かってくれる方はいませんか？」というものである。それに続くあの静寂は、誰かの返事を待つ沈黙である。ベートーヴェンは、あの曲に自分が感じる、そしておそらく、彼の身近にいたどんな友人にも理解してもらえなかった自身の孤独を音楽に込めたのではないか。時代を超えて、孤独や絶望を分かち合う仲間を探すために。

そう思うと、あの美しい 2 楽章の優しさなど飾りに過ぎない。あるのは孤独である、絶望である。終楽章の疾走も、無知な我々にたたきつける怒りである。「なぜ誰も分かってくれないのか！」と。

次のテンペストも、多少柔らかな表情を持つ曲ながら、基本的に印象は変わらない。この 2 曲の間に、あの難聴*が始まったようだが、今回の演奏からは、難聴とは関係なく、ベートーヴェンが強い孤独感を曲に込めたように聞こえる。

＊難聴：　ベートーヴェンは、耳が聞こえなくなったという話がある。しかし、正確には、難聴により複雑な音が聞こえなくなったらしい。ピアノ一台なら聞こえるが、オーケストラみたいに複数の音が交錯する音楽は、まともに聞こえないというものらしい。

休憩をはさんで、プログラム最後はピアノ・ソナタの第 32 番。ベートーヴェン最後のピアノ・ソナタである。私の最も好きな彼のピアノ曲である。私の苦手な一楽章はよくある演奏とは違い、グロテスクさは少ない。けれど、抑えた悲しみはしっかり聞こえてくる。これまで聴いたどの CD からも聞こえなかった悲しみである。

そして、いよいよ後半の二楽章。まるで一人語りのように、丁寧にメロディが歌われる。テンポは速めだが、一音一音が大事に弾かれる。音楽は、孤独から思索に移る。まるで、身の回りしか見ていなかった作曲家の目が、ずっと遠くに向かうようである。音楽は透明感を増し、まるで彼岸にいるようだ。

と、急に音楽が膨らみだした。

いったん死に近づいた音楽が、急にこの世に戻ってきたか。音楽は生命力を増し、まさに炸裂する。ほんの一瞬で、音楽が 180 度変わってしまう。こんな 32 番、聴いたことがない。音楽は勢いを増し、それこそ跳ね出す。跳ね回って踊り出すかのようだ。あのいかめしいベートーヴェンが、こんなに闊達な音楽を作ったとは！

今回は、ピリスの引退ツアーである。最後を締めくくるに相応しい、「さよなら」のメッセージを込めた演奏もできたであろう。しかし、彼女は、あの強烈な命の躍動を最後に据えるプログラムを組んだ。彼女にとって、表現すべき音楽とは、きっとあの生命の輝きなのだ。彼女ももう 73 歳。これから先、この輝きを演奏で表せなくなるかもしれない。それは、ピアニストである彼女にとって死なのだろう。だから、まだあの圧倒的な音楽を作れる今、引退するということなのではないか。それにしても、圧倒的な音楽の頂点だった。

最後のツアーで初めて、彼女の素晴らしい演奏を聴くことができた。彼女の演奏でなければ分からない音楽を体験することができた。天才少女は、その後も変わらず天才だったのだ。

なお、あまりにその日の演奏が良かったので、思い切って同じプログラムを大阪まで聴きに行ってしまった。残念ながら私には、サントリーホールの時のような圧倒的な高みには届かなかったように思う。良い演奏ができること、いい演奏に出会うことは、なんと難しいことだろう。

勝手にエッセイ

金田一の海苔巻き

間々えいよ

海苔巻きを作った。

鰹節に醤油をかけよく混ぜる。海苔の上にご飯をのっけて、おかか醤油を一本道のように真っすぐに引く。その上にマヨネーズをまた一本。ぐるっと巻いて、あら出来上がり。

その海苔巻きを片手に、読みます本は「犬神家の一族」。

「ながら食べ」はお行儀が悪うございますが、犯人が気になってしょうがない。あっと言う間に一本食べ終わると、もう一本食べたくなった。これは食べすぎでは。しかし、すりごまを入れたらもっとおいしくなるかも。と言う考えが浮かんでしまい、もう一本作ってしまった。

たしか、サンドイッチ伯爵はトランプゲームをするのに夢中で、ゲームをしながらランチができないかと考え、パンに肉を挟んだサンドイッチができたと聞いたことがある。

今日の私は「海苔巻き伯爵」だなと思ったら、頭のてっぺんがピンとなった。

これは、カフェで売り出したら面白いかもしれない。

本と一緒に海苔巻き一本。

もちろん、海苔は有明海産です。見てください、この黒々としたツヤ。

食べた瞬間「パリッ」、聞こえたでしょう。海苔に厚みがある証拠です。そして中身はおかかにマヨネーズ。マヨネーズを入れるのがポイントですよ。おかかがマイルドになって、これまたおいしいでしょう。

もちろん、シーチキンでもいいですよ。でもうちは、缶の分別が面倒でね、海苔巻きはおかか一本なんです。そう考えたら、止まらない。それだったら、犬神家の一族で有名なあのシーン、湖から突き出した足を連想させて海苔巻きは 2 本で提供しよう。

あらら、いかんいかん、続きを読まなければ。

ゴマ入りの海苔巻きを片手に続きを読む。

でも映画もドラマも見たのに、思い出せない。犬神家の一族の犯人、誰やったっけ。

君の空を飛びたい　紫雲夜想

「翼がほしかったんだ、俺」
少年は続けた。
「自由に暮らしていけるだけの翼が」
黄昏時を告げるように、太陽が西に沈んでいく。公園を吹き抜ける風が少し冷たいのは、秋から冬へと季節が変わっていくからだろう。
「そういえば、こんなこと誰かに話したことなかったな」
少年はゆっくりとこちらを向いた。
「そうなの？」
私は、彼の物憂げな表情をみて、体のどこかがチクリと痛むのを感じた。同時に、私は今のままで幸せで、少年のようにこれ以上の自由を望むことが、よく分からずにいた。
「自分のすべてを自分のために使えたらって、考えることないか？」
「え？」
私は、少年の唐突な問いかけに少し戸惑った。
「俺は誰かのためじゃなく、自分のために生きていきたいと思っている」
少年は顔を前に向け、遠くの山を見つめながら言った。
「すごいね。考え方が自立してる」
私は少年の言わんとしていることを一生懸命考えたが、やっと口にできたのは、こんな簡単な言葉だった。
「俺は、ちっともすごくないよ」
少年は、小さく答えた。

カー。カー。
少年と私の沈黙を破るように、一羽のカラスが鳴いた。
「来いよ。少しだけ遊ぼうぜ」
少年はどこへともなく、言葉を発した。
すると、先ほど鳴いていたカラスだろうか。
カラスが一羽、空から舞い降りてきた。カラスは、つかつかと少年の方に歩みより、ひょいと少年の右腕に乗った。

カー。
「よしよし。今日もよく飛んだか？」
少年は、カラスを労うようになでた。私は自分の目の前で起きていることに、驚きを隠せなかった。
「カラスと友達なの？」
「ああ。こいつはどう思っているのか知らないが、俺は少なくとも友達だと思っている」
「へぇー。名前とかあるの？」
「俺が飼っているわけじゃないからな。名前をつけてこいつを縛るようなことはしなくないんだよ」
「そうなんだ」
私は、カラスをこんな風に懐かせている人を見たことがなかった。
「結構暗くなってきたな、帰るか」
じゃあ、またなと少年は右腕を空へ向かって押し上げた。カラスは、大きな翼をはためかせながら、夕闇の空へと帰って行った。

あの少年は、元気にしているだろうか。
私はふとそんなことを思った。少年と出会ったのは、私が中学生の頃だった。高校受験のために塾に通っていた私は、塾へ行く道の途中に、公園によっていくことを日課にしていた。今思えば、鳴かず飛ばずな自分の成績を、頑張りを、努力を、誰かに受け止めてほしかったのかもしれない。
私が公園に行くと、少年がいた。私より少し背が高く、端正な顔立ちによく似合う落ち着いた雰囲気を醸し出している。
「塾に通ってるのか。大変だな」
ベンチに座りぼんやりとしている私のところに、少年がやってきた。
「どうして塾に通っていることを知ってるの？」
「いつも同じ時間にここへきて、同じ方向に向かっていくだろ」
カバンの荷物も重たそうだしと少年は言った。
「あ」
私は、ただの日課として公園に通っていることを、このように誰かに見られていることを知らな

かった。
「俺、絶対塾いかねぇ。俺のペースでやらせてくれねぇからな」
「え？自分のペース？」
「ああ。」
少年は夕焼けの空を見上げて言った。
「きつくねぇ？自分のペースじゃないと」
「あ、えっと、そんなの考えたことなかった」
母に、「絶対役に立つから」と言われて、塾に通い、早四年が経過していたが、私は塾通いと自分の成績が全く比例していないのは全部自分のせいだと思っていた。
「人様のことをそんな言える立場にないけど、無理するなよ」
「あ、ありがとう」
少年の思わぬ言葉に少し戸惑っていた私は、ある決定的な疑問に気づいた。私は、少年のことを何一つ知らない。
「あの、名前は？中学生？どこに住んでるの？」
「質問多いな」
少年はくすくすと笑った。
「ごめんなさい。私はあなたのこと何も知らないのに、あなたは私のこと知ってるみたいだし」
「名前は、烏野（からすの）　雅（みやび）」
「私立の青空中に通っている。家はこの近くだ」
烏野くんは、一通り自分のことを説明してくれた。私は、こと名前に聞き覚えがあった。私立青空中は名門校で、そこの学年トップが確か「烏野」という人だったはず。彼の噂は広く知れ渡っているため、いくら成績不振の私でも、名前だけは知っていた。
「烏野くんて、あの烏野くん？」
「なんだ。知ってるじゃん、俺のこと」
烏野くんは、何やらニヤニヤしている。
「そっちは？名前なんていうの？」
自分とは雲泥の差の人が、自分の名前を聞いていることに私は戸惑った。
「羽原（はばら）　夕姫（ゆうき）」

「公立青葉中で、住んでいるのはこの公園の近くで・・・」
しどろもどろになりながら、私は烏野くんに自己紹介した。
「夕姫か。いい名前だな」
烏野くんは、何かを噛みしめるように言った。
「自分の名前、私も気に入ってるんだよね」
「夕暮れ時の姫とかマジでかっこいいな」
「ありがとう」
なぜだろう、自分の名前が輝きを増したように思える。
「俺も、自分の名前気に入ってるんだ。言うなよ、誰にも」
「うん。言わない」
それから、私たちは公園でよく話すようになった。私が塾に行く途中に公園に行くという「ただの日課」が、いつしか私の「居場所」になった。
「勉強が、テストの点数に全然つながらない」
私は烏野くんに自分の成績がどうしようもないことを話した。
「たぶん、テスト問題と自分の知識が、うまくつながってないだけじゃないか？」
「え？」
「俺も、そんな時あったよ」
大丈夫、いつか解けるようになると烏野くんは言い、私の嘆きを聞いては、いつも私を何らかの方法で励ましてくれた。

今では、私も大学生になった。あの少年、いや烏野くんは元気にしているだろうか。私は忙しく、しかし充実している毎日の中で、ふと彼のことを思い出した。あの時、あの公園で彼に出会っていなければ、今の私はいないだろう。気づけば、私は「公園」の近くを歩いていた。
カー。カー。
空を見上げれば、一羽のカラスが飛んでいた。
私はもしかしてと思いながら、そのカラスの動きを追った。カラスは「公園」に向かっていた。気のせいだと思いながらも、どこかで期待している自分を恥じながら、私は「公園」へと走った。

「羽原じゃねぇ？」
公園には、カラスを右腕にのせた青年がいた。
「烏野くん！」
「元気だったか？今何してるの？」
「大学生してる。烏野くんは？」
「へぇー、頑張ったじゃん。俺も大学生。」
カラスを追いかけてよかった。私はカラスへのこの上ない感謝の気持ちでいっぱいだった。
「こいつが、羽原を連れてきてくれたんだな。ありがとう」
烏野くんは、満面の笑みを浮かべながら、カラスの背を撫でている。
カーカー。
「専攻は？大学で何を勉強しているんだ？」
「文学だよ。ヨーロッパの童話や物語を勉強してる」
「やるじゃん。面白そうだな」
「うん、すごく面白いよ」
「烏野くんの専攻は？」
「俺は、工学。」
「わぁ、工学かぁ。すごいなぁ」
「何もすごくねぇよ」
烏野くんは少し自重気味に言った。
「俺、来年からアメリカに行くんだ」
「え？」
私は、自分の耳を疑った。
「アメリカのヒューストンにある、宇宙開発会社の内定とったんだ」
俺、夢だったんだ、ずっと。
私は言葉を失った。自分の夢を叶えようとしている青年が、とても眩しく見えたからだ。せっかく会えたのに、何も言葉が浮かばない。私の中で言葉にならない「感情」だけが暴れていた。嬉しい、悲しい、苦しい。でも応援したい。
「羽原？どうしたんだ？具合でも悪いのか？」
私の百面相を彼は見逃してくれなかった。
「違うの。せっかく会えて、烏野くんが元気で、大学生やってて、やっと同じステージに立ってる

と思ったら、アメリカへ行くなんて、烏野くんはすごい」
「羽原・・・」
「私の今があるのは、烏野くんのおかげなの！」
「中学の時、私のことを認めてくれたのは、烏野くんだった」
気がつけば、私は泣いていた。
「羽原は、頑張っていたからな。そんなの見ただけでわかった」
頑張っているやつは応援したくなるんだよ。
だから、羽原の視界に入るように、俺は話しかけた。いつしか、羽原が公園に来る時間を狙うようになった。その時はまだうまく言えなかったけど、羽原を待つ理由が増えたんだ。
「好きなんだ。羽原のことが」
俺、この想いを羽原に伝えられないままアメリカに行くんだって、もういっそ「いい思い出」にしようかと思った。でも、「公園」に行けば、また羽原に会えるような気がして。
「聞かせてくれないか、羽原の気持ちを」
烏野くんの切迫したまっすぐな気持ちは、私の心を容赦なく貫いた。今こそ、言葉にできずにくすぶっていた想いを伝える時だと、強く感じた。
「私で、いいのかな・・・」
気がつけば、夕闇が私たちを包んでいた。
黄昏（トワイライト）時は女の子を一番綺麗に見せてくれる魔法の時間と言うけれど、私は今、烏野くんにどんな風に写っているのだろうか。
「俺、前に話したと思うけどさ、翼がほしいって言ってただろ」
「うん」
「俺、ヒューストンで宇宙ステーション作ってさ、そいつが羽原の頭の上の空を飛んだら、もう何も言うことないんだけど・・・」
「待ってる。毎日空を見上げて待ってる」
夢は、「叶う」か「叶わない」ではなく、夢を追うことそのものが、この上なく素敵なことだと思えるから。君の空を飛びたい。

ナツノメ

詠人（よみびと）　不知（しらず）

目の前は真っ暗だ。お先真っ暗とはこの事だ。深夜マジで深すぎて、月明かりだけが小生の頼りだ。六畳の独房でだるまさんが転んだ。一人遊び、志望遊戯、気づけば夢中に、自由に、終始、宙に、注意…。案内は命令に変わる。警告は督促に変わる。マイライフライン、弾くタイプライター、ライラライ、万年補欠の勘違い、カウントツースリー、グラウンドでぼやく無理、ラストボール、鳴りやまぬコール、一か八か、振るか見逃すか、やるか逃げるか…。

　嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

　蛇口から最後の滴が流れ落ちた時、小生はシャウトしシャットダウンし、バウンスバウンス、ダンスウィズミー。滴は泉、やがて湖。マウスマウス、日々を廻るスタンス。敵は我なり、黙れカネナシ、アグラ、ジャグラー、桜は咲いたか散ったか否か。田舎、今はもう無いんだ、未だ記憶の彼方…、ん、ところで、あなたは福沢さん？

　マウント状態でうずくまったまま、穴の空いたジーンズの右ポケットをまさぐると、くしゃくしゃの顔をした奴が現れた。

「…わ…、吾輩は猫だよ～ん。」

　にゃーぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

ケムリグサスイガラビルディング、アルコールカンカンシティー、口笛吹いて歩こうランラン道、ところで今宵はやけに月が綺麗ですね……ｚｚｚ…。

……朝顔が咲いていた。

　本日も宇宙からの生還を無事に遂げていた。ここには時計などあるわけもない。

　盗まれそうになったバイクで走り出す。国道3号線を只ひたすら真っ直ぐ走り出す。つまりは小生のバイト探しが始まったのだ。道の途中、とあるコンビニエンスの窓に貼られた一枚の紙が視界に飛び込んだ。

　アルバイト募集中。

　直ぐ様、コンビニエンスの駐車場に頭から突き刺さるようにバイクを止めた小生は、コンビニエンス店内へ侵入した。

「いらっしゃいませ～」

　店員の蝉の鳴くような音声が耳に突き刺さる。

「いらっしゃいました。おもての貼り紙を見たのですが…」

　後日、履歴書とやらを持って出直してきてほしいとまどろっこしい事をぬかしやがる。

　全く良い気分にならず、小生はバイクにまたがり、それでもちょっぴりバイトを見つけた事に喜びを噛みしめて帰っていると、またもや違うコンビニエンスの窓に貼られた一枚の紙が視界に飛び込んだ。

　アルバイト募集中。

　直ぐ様、コンビニエンスの駐車場に頭から突き刺さるようにバイクを止めた小生は、コンビニエンス店内へ侵入した。

「い…いらっしゃいませ…」

　店員の蚊の鳴くような音声が耳に突き刺さる。

「いらっしゃいました。おもての貼り紙を見たのですが…」

　後日、履歴書とやらを持って出直してきてほしいとまどろっこ

しい事をぬかしやがるⅡ。
ナナオとヤマザキさんを二股にかけた小生は、ちょっぴりブレイボーイ気取りで喜びを噛みしめて、右ポケットにしたためておいた吾輩を差し出し、ヤマザキさんの所で履歴書を購入した。
そのまま帰り際に、初めて履歴書の写真撮影に挑むことになる。バラバラになった吾輩をチャリンチャリンと入れ、撮影が始まる。
はいチーズ、カシャッ。
説明を読んでいた小生は不意をつかれ、豆鉄砲を食らった鳩男として画面に君臨している。
再度取り直しを希望し、ボサボサの髪の毛を横分けに撫で付けながら、姿の見えぬカメラマンの様子を伺う。
はいチーズ、カシャッ。
緊張からかこわばった顔つきは恐ろしく、指名手配中の一一〇番男として画面に君臨している。
これでは受かるものも受からない。
ラスト、三回目の撮影に挑むことにした。
ここはやはり良い印象を与えなければバイトには受からないぞ、という事で満面の笑みを浮かべてみる。
が、普段しかめっ面の小生であるから、なかなか満面の笑みが浮かべられない。
画面には顔にインチキと書かれた胡散臭い男の薄ら笑いだけがこれでもかと君臨している。
それでもなんとかバイトに受かる顔を作成していると、姿の見えぬカメラマンがあっさり言う。
はいチーズ、カシャッ。
撮影は終了しました、お疲れ様でした。
写真が出来るまで箱の中でぽつんと座っていると、外からガッコンと音がする。恐る恐るカーテンを開けて覗くと写真が出てきている。
その出来立てホヤホヤの写真を見て小生は愕然とした。
撮影までの短時間、即席の笑顔作りに励んでいた小生の苦労も虚しく、胡散臭い薄ら笑いは健在で、しかも姿の見えぬカメラマンの嫌がらせか、シャッターのタイミングが悪く、なんと目をつぶっていたのだ。
目をつぶって薄ら笑いを浮かべた男など怪しさこの上なく、誰がこんな奴を雇うのであろうか。
そう思うと身震いがしたが、もう一度チャリンチャリンする程のバラバラの吾輩も、もはや残っておらず、小生はその怪しい薄ら写真を仕方なく持ち帰った。
「ねぇねぇ、日差しが強い夏の日ってさ、目が眩しくってつぶったような状態になるよね。」
「そうそう、そんな事あるある、みんなつぶらっていうかさ、グラサンっていうかさ、前が見えないよ〜みたいなさ。」
「お隣の稲造ちゃんなんて、いつも寝てるんだが起きてるんだか。」
「最近はナツノメっていう目をつぶって1日やり過ごすのが流行りだってテレビで言ってたよ…。」
まさに目の前は真っ暗だ。お先真っ暗とはこの事だ。深夜マジで深すぎて、小生は怪しい薄ら写真を「ずっとこんな顔なんです。」と言わんばかりに、目をつぶり薄ら笑いを浮かべたまま、終始バイト面接を受けるかどうかというアホな難題を真剣に考えながら、またしてもそのまま眠りについた。
眩しすぎる、スリリング、スリープ、クローズアイズ、ソーダアイス、シューガーナッツ、カレーライス、愛す、ナツノメ、ブルーデイズから今日、そして明日へ。

（おわり）

衣空の映画放談

～スウェーデン映画と邦題の「すてき」な関係～

昨年末に行われた、星屑書房の忘年会で掲げた二〇一八年の目標、「スウェーデン語能力検定試験の受験」を無事終えた。結果はこれを書いている時点でまだ分かっていないが、正直に言って手応えは全くないので、六月になってもツイッターなどに何も書いていなければ、不合格だったのだなと察して欲しい。

そもそも私がスウェーデン語の勉強を始めたのは、二〇一六年に惜しくも解散してしまった私の愛するバンドがスウェーデン語で歌っていたから、歌詞を理解できるようになりたいという一心だった。

一念発起してスウェーデン語を勉強しようかと言っても、東京大阪のような大都会にはスウェーデン語の教室や学校もあるが、福岡のような地方都市にはスウェーデン語の教室などあるはずもなく、私の勉強方法は当然独学になってしまう。

ありがたいことに福岡には意外にスウェーデンからの留学生が多く来ている。現在移転しているが、以前天神イムズにレインボープラザという、国際交流に関する資料や情報を集めた施設があった。そこに設置されていた、語学学習の生徒募集用掲示板でTちゃんというスウェーデン人の留学生を発見し、三か月ほどスウェーデン語を習っていた。

スウェーデン語を勉強していると人に話すと「スウェーデン語って難しいの？」とよく訊かれるが。英語をある程度勉強していれば、読み書きはさほど難しくない。しかし聞き取りの難易度が

非常に高く、テストのためにしっかり勉強したにも拘わらず、その認識は全く変わらない。スウェーデン語を一時間聞いた後に英語を聞くと、「英語とは何と簡単な言語なんだ！」と感動するくらい難しい。

そこで映画好きの私としては、聞き取りの練習のために、何か面白いスウェーデン映画はないのかとTちゃんに尋ねてみた。その時に教えてくれたのが Tillsammans（ティルサマンズ・英語で Together の意）という映画である。Tillsammans は「エヴァとステファンとすてきな家族」という邦題でDVD化されていた。たびたびレンタルDVDショップで映画を物色していた私は、「エヴァとステファンとすてきな家族」というタイトルは記憶にあった。しかし今でこそ Tillsamman は好きな映画の一本で時々無性に観たくなるが、タイトルの印象からファミリー向けの映画だと思い込み、その手の映画には興味がないので無視していたのである。

（以下ネタバレもあります）

エヴァとステファンの父親ラルフは酒を飲んで二人の母親であるエリザベートを殴り、二人を連れて家出されても中々酒をやめられないダメ親父。エヴァとステファンを連れて家を出たエリザベートは、兄ヨーランの住むコミューン Tillsammans に身を寄せるのだが、そこに住む大人がなかなかユニークである。性病になったと言って人目も憚らず下半身丸出しで生活するレズビアンのアンナ。その元夫のラッセは一緒に生活するゲイのクラッセとできてしまう。伯父のヨーランはとても優しいが優柔不断で、「オープンな関係」を望む恋人レナと付き合っている。しかしレナは住人の共産主義者エリクともできているし、エヴァと仲良くなった隣人の十四歳のフレドリクにまで手を出そう

とする始末。なかなかのカオスである。Tちゃん曰く「スウェーデン人はみんな観た（実際は三人に一人くらいらしいが）」という映画にしては癖のある映画である。「エヴァとステファンとすてきな家族」という邦題に騙されてほのぼのファミリー映画だと思って無視していた私とは逆に、ほのぼのファミリー映画だと思って家族や子供と観た日本人もいたに違いない。さぞかし気まずかったことだろう。もしもこれを読んで「ちょっと観てみようか」と思った方がいたら、一人で観るか、一緒に観る人をよく選んで欲しいと思う。下ネタ耐性の全くない方と一緒に観るのはお勧めできない。映画というのは一緒に観る人が誰だったかによって、その後の印象が違うものである。

この「エヴァとステファンとすてきな家族」のように海外の映画の邦題が原題と違いすぎて変、というケースはよくある。特にスウェーデン映画はその傾向が強い気がしてならない。日本における北欧のイメージ、「おしゃれ」で「ほのぼの」していて「癒される」感じをアピールして、その手の映画が好きな人を呼びたいのかもしれないが、意外と毒はあるし、シュールだし、淡々とし過ぎていて退屈な映画もある。扱っているテーマもシリアスである。Tillsammans は下ネタが多いが、ハリウッドのあからさまに笑いを取りに来ていると分かる下ネタ映画とは違って、いたって真面目である。「コメディ」ではなく、「多様性」と「社会問題」を子供目線で見ている映画なのだ(多分)タイトルで「ほのぼのファミリー映画」であるかのようなミスリードするのはよろしくない。

他にも数年前に日本で「幸せなひとりぼっち」というスウェーデン映画が公開されたが、原題は En man som heter Ove と言い、直訳すると「オーヴェという男」である。主人公の老人オーヴェは

妻に先立たれ、仕事をクビになり、生きる希望を失い何度も自殺しようとするがいつも邪魔が入り、悉く失敗。しかし隣に越してきたバルヴァネという女性の一家と交流を持つようになると、孤独だったオーヴェの周りが賑やかになり、自殺を試みることも少なくなる。この映画は「何だかんだ言っても人との繋がりはいいものだ」という映画であって、「独りで生きていても幸せ」という映画ではない。

日本語とスウェーデン語間で上手い訳ができないのは仕方のないことだし、何でもかんでも否定するわけではないが、ストーリーとかけ離れ過ぎではないのか。

原稿枚数の都合上詳細は割愛するが、邦題「ぼくのエリ　２００歳の少女」という映画がある。少年オスカルと吸血鬼エリの関係を描いた、非常に美しい映画だ。原題はLåt den rätte komma in というのだが、この作品に関しては映倫とタイトルに怒りしか覚えないほどのものである。「嘘を言うな」と言いたいところだが、精一杯好意的な言い方をすれば、「この映画の『真実』を知れば、二度楽しめる」興味がある方は、映画を観てからググってみて頂きたい。ググってから観てもそれはそれで構わないと思う。

この「ぼくのエリ」という邦題は劇中主人公オスカルにエリが残した置手紙の最後に書いた「din Eli」から来ていると思われる。しかし直訳ならば「君のエリ」が正しいので、これもまた納得いかない。

またネットでこの映画のことを検索すると原題のLåt den rätte komma in を「『正しいもの』を迎え入れよ」と訳して書かれていることが多いのだが、どうしてもしっくり来なかった。このタイトルを英語に直すとLet the right one in になり「正

しいもの the right one =den rätte を迎え入れよ」としているのだと思うが、スウェーデン人の友達曰くden rätte というのは「正しいもの」ではなく、「自分にぴったりの人」とか、「理想の人」という意味なのだそうだ。吸血鬼は家に入りたければ、その家の者に招かれなければならないという言い伝えがあるらしいので、それと絡めてのタイトルなのだと、スウェーデン人の友人の説明を聞いて、ようやくすっきり理解ができた。映画の中に正にそんなシーンがあるので、ご覧になる際は、ぜひオリジナルのタイトルと照らし合わせて観ていただきたい。

粗ばかり探しているようになってしまったが、それでも私はスウェーデンの映画が好きである。あの至って真面目な、笑わそうとしているのかどうかもよく分からないユーモアは大好物である。だからこそ邦題はもう少し内容に合ったものにしてほしいと思う。

この原稿を執筆している間、「ザ・スクエア　思いやりの聖域」という映画が上映されている（福岡では現在上映中）この原稿が終わったら観に行く予定である。カンヌ映画祭で最高賞のパルムドール受賞、アカデミー賞外国語映画賞にノミネートされていた。トレーラーを観た限り、なかなか風刺の効いていそうな作品で楽しみだ。

蛇足だが、En man som heter Ove というタイトルは、「〇〇という××」という文章を考えるときにいつもヒントになる。例えば「En tidning som heter Sosei（創星）」というと、「創星という雑誌」という意味だ。とても役に立つフレーズである。

【@sju7_fyra4_sju7】

ツイッターアカウントあります。フォローはご自由にどうぞ。

クラシック音楽教養のお時間

天沼　太郎

番外編　その3　物故指揮者たち　ゲオルク・ショルティ

先日クラシック好きの上司と話していて、ゲオルグ・ショルティ*の名前が出てきた。ショルティの評価は、私とその上司とでだいぶ違うみたいだったけど(私はそれほど良い指揮者と思っていない)、しかし、ショルティには、一点、感謝してもしきれないことがある。今回はその話を紹介したい。

＊ゲオルグ・ショルティ:1912-1997。　ハンガリー生まれの指揮者、ピアニスト。ロンドン響、シカゴ響で長く音楽監督を務めた。特に、1958 年から始めたワーグナーのオペラ「ニーベルングの指輪」全曲録音は、世界初の快挙。BBC が彼の最晩年に撮影した番組は必見。

話変わって、チャイコフスキーの交響曲第5番*を最初に聴いたのは、リッカルド・ムーティ*指揮フィラデルフィア管弦楽団*の演奏だった。イタリア・オペラ*を得意とするムーティだけに、最初から最後まで、それこそどのフレーズもと言いたくなるぐらい見事に歌っている。特に終楽章は圧巻で、金管楽器の音割れを極力抑え*、感動的な幕切れとなる。最初に演奏を聴いたとき、スターウォーズ*の第一作、最後にあるメダル授与式の場面を連想してしまった。「晴れやか」、「華々しい」、「勝利」、「幸福」、めでたい言葉はどれも当てはまる輝かしい演奏である。

＊チャイコフスキー交響曲第 5 番:チャイコフスキーは 6 曲の交響曲を作曲しているが、番号の通りその 5 曲目。この 5 番だが、ベートーヴェン交響曲第 5 番(いわゆる「運命」)の影響だろうか、「苦悩から勝利」というストーリーで聴ける曲が多い気がする。
＊リッカルド・ムーティ:1941-。イタリア生まれの指揮者。イタリア人だから？オペラが見事。オーケストラを指揮することも多いけど、機会があればオペラを聴いて欲しい。緩急自在、歌心にあふれた見事なオペラを聴かせてくれる。
＊イタリア・オペラ:オペラといえば、イタリア・オペラがオペラの源流。オーケストラをバックに、歌手が歌と演技を披露する。ヴェルディ、プッチーニなど、有名なオペラ作曲家がいる。
＊金管楽器:ホルン、トランペット、トロンボーン、テューバなど。普通に演奏しても美しいが、弦楽器を圧するような強音が金管楽器の魅力。実際の演奏会でそれが効果的に使われたとき、音楽観が変わる。
＊スターウォーズ:いわずと知れたジョージ・ルーカスの SF 大作。エピソード4(劇場版第 1 作)を、大人になってから映画館で見たが、あの映画の素晴らしさは、映画館の巨大スクリーンで見ないと分からないと思った。最後の授賞式シーン、ジョン・アダムズの曲も素晴らしいが、私はいつも、今回のチャイコフスキーをバックに思い出してしまう。

ところが、最初にこの演奏を聴いてしまったのが悪かった。他のどの指揮者も、ムーティのように歌えない。どの指揮者も金管楽器を安っぽく鳴らしてしまうのだ。カラヤン*も聴いた、小澤征爾*も聴いた、インバル*も聴いた。一時期、新聞のラジオ欄で見つけたチャイコフスキーの 5 番は、聴ける限り聴いた。ところが、どれほど凄い指揮者であっても、期待の終楽章、せっかくの崇高な音楽に、突然暴走族のような爆音が混じってしまうでのある。せっかくの名曲をぶちこわしてしまう。

＊カラヤン、小澤征爾、インバル:いずれも有名指揮者。機会があれば、この連載でも取り上げたい。インバルは、「火の鳥」の素晴らしい録音がある。

もちろん、他の指揮者は考えることがあって音を割っている。おそらくは、ムーティが変わっているのであり、そんなムーティのおかげで、他の素晴らしい(かどうか分からないけど)演奏が聴けなくなってしまった。有名なムラヴィンスキーによる 1960 年のウィーン録音*も、何故か 5 番だけ録音が悪くてとても聴けない。一緒に録音された交響曲の4番、6番は演奏も録音も素晴らしいのに。

＊ムラヴィンスキーの(略)ウィーン録音：鉄の壁の向こう、ソビエトから来たムラヴィンスキー&レニングラード・フィルの夢のようなチャイコフスキー交響曲録音。特に4番、6番「悲愴」は人類の至宝。

そんなわけで、チャイコフスキーの5番に関して、長いことムーティの演奏以外受け付けなくなってしまった。

ムーティの演奏は、もちろん、悪い演奏ではない。けれど、例えばミッシェル・コルボが指揮したフォーレのレクイエム*みたいに、他の演奏とは比較にならないほどの隔絶した演奏ではない。曲としても、曲全体に張り巡らされた主題が、次々と変奏され、終楽章で最も晴れやかな勝利の曲につながるその変奏を楽しむこともできるが、理屈抜きで、最後がハッピーエンドになればそれで満足できるような単純な演奏もできる。聴く方も、聞き流しているうちに最後だけぐんぐん盛り上がって何だか幸せな気分になったりするのだが、そんな聴き方をしている内に、この曲自体飽きてくる。

＊ミッシェル・コルボが指揮したフォーレのレクイエム：録音は何点か出ているが、1972年の録音。ソプラノパートをボーイ・ソプラノが担当しているのが特徴。これが悶絶するぐらい美しい。何故か1000円足らずで売られている。見つけたら即購入しよう！

作曲したチャイコフスキーは、この曲をあまり気に入らないような言葉を残しているが、もしかしたらこのような理由かもしれない。

ムーティの演奏にも、そういう表面的に楽しめてしまうところがあり、せっかくのこの名曲を楽しむために、他の指揮者の演奏を探していた。

ショルティの演奏を聴こうと思ったのも、彼の亡くなる少し前、確かロンドン・フィルだった記憶しているけど、ブルックナーの交響曲第2番*の演奏が、特に冒頭が素晴らしく綺麗だったためである。それまでは、ともかく演奏に溜めがなく、印象に残る演奏をする指揮者とは思っていなかった。

＊あまり言われないが、交響曲第2番は名曲が多い気がする**。お勧めは、ベートーヴェンの交響曲第2番。1番(ベートーヴェン最初の交響曲)や3番「英雄」(交響曲の歴史を変えた！)に隠れて、演奏される機会は少ないが、あの厳ついベートーヴェンとは思えない柔和な曲である。
＊＊一方で、交響曲5番はまた名曲揃いである。交響曲を4番までしか作らなかったブラームスは、もう少し長生きすべきだった。

雑誌のラジオ欄でショルティの指揮するチャイコフスキー5番を見つけ、それほど期待したわけではないけど、聴いてみることにした。どんな演奏になるのだろう。

ところがそれが、とんでもない演奏だった。

人間、突き詰めるというのはこういうことを言うのだろう。ショルティには、金管楽器で音を割ることへの躊躇いがない。最初っからバリバリバリバリ金管楽器が素晴らしい爆音なのである。ショルティの別の演奏のことだけど、評論家の誰かが「人間、ここまで思い切れるものではない」と感心していた。まさにそれである。本人はオーケストラを歌わせてるつもりかもしれないけど、私にも耳には金管楽器絶叫大会にしか聞こえない。

しかし、である。そこまで徹底的な演奏を聴くと、却ってすがすがしい。それどころか、演奏に風格さえ感じてしまう。いや、それどころか、このチャイコフスキー以外にも、ショルティの演奏はかっこいいものが多いのである。ここに至って初めて、ショルティがデッカレーベルに大量の録音を残せた理由が分かった。ワーグナーの指輪全曲録音を残した「過去の」名指揮者だけではないのだ。

一方に、ムーティの歌に徹した演奏があり、もう一方に歌を捨て去ったショルティ演奏がある(ショルティは彼のやり方で歌ってのかもしれないけど)。そのどちらにも、演奏として強い説得力を感じる。演奏への強い意志を感じ、音楽に生命力を感じる。

そうなってくると、さらに良いことに、他の演奏も聴けるようになった。カラヤンも、小澤も、インバルも、別に中途半端な演奏なのではなく、演奏に生命力を吹き込むための頂点の作り方が違うだけなのだ。(もちろん、私には理解できない演奏はある。)

ショルティのおかげで、私はチャイコフスキー交響曲第5番のいろいろな演奏を楽しめるようになった。その後、レナード・バーンスタインがニューヨーク・フィルを指揮した素晴らしい演奏を見つけられたし、ギュンター・ヴァントのスタイリッシュな、けれどしっかり芯のある演奏を楽しむこともできた。そして、チャイコフスキーに限らず、金管楽器が音を割って他の楽器の音を消してしまっても、それには必然があり、そうやって初めて表現できることがあることを身をもって体験できた。

もちろん、ムーティはいい指揮者である。ショルティも素晴らしい指揮者である。いろいろな指揮者が各人の信じる音楽観に従い、各人の方法で他の演奏家から聴けない演奏をする。書いてしまえば当たり前のことだが、それは一体どういうことなのか？ショルティのおかげで、私はその意味することを体感でき、そして聴くことのできる音楽の世界が大きく広がった。ショルティにはいくら感謝してもしきれない。

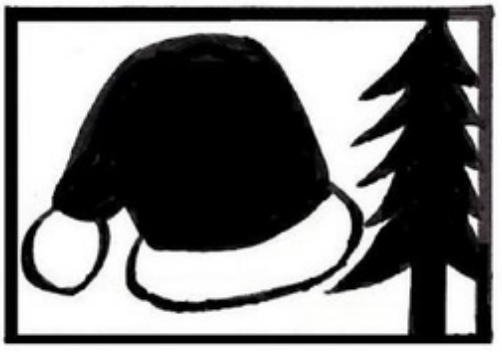
クラシック小話

2016年10月13日(木)、東京・サントリーホール
ウィリアム・クリスティ指揮のレ・ザール・フロリサン
演奏曲:『声の庭』第7弾イタリアの庭で～愛のアカデミア

昨年、ウィリアム・クリスティの演奏会に行ってきた。フランス・バロックの名曲を寄せ集めたオペラみたいな演奏会である。優雅な演奏をすると聞いていたが、本当に素晴らしい演奏。柔らかくて、綺麗で、切なくて、至福の時間。ただ、一つ失敗したのが、チケットを買うのが遅くて、2階席しか取れなかったこと(それでもS席ではある)。 ステージから遠い席なだけに、演奏を聴きながら、もっと前で聞くことができたら、あの美しい音楽がより美しく聞こえるのだろうと悔しく思うことしきり。
そう思ってホールを見ると、なんと前の方はがらがらではないか。チケットは売り切れなのに、どうして席が空いているのだろう？そこで、休憩時間にこっそり前へ、空いている席に移動してしまった。
しかし、人もまばらな前方の席に移動すると、今度は却って周囲の目が気になってしまう。せっかく前に移動したのに、これでは、2階で悶々としながら聴いていた方が良かった！

タンカトイラスト

―種々雑多編―



松田　定幸

歳末に
少女が挑む
商いの
クライマックス
いざ出陣

神々が
屯(たむろ)う場にて
振る舞いし
水瓶座(ガニュメデス)が
注ぐ御酒(ネクタル)

端午の日
未来(あした)を描く
男児(おのこ)たち
瞳に映える
昇鯉と鎧武

勝手にエッセイ

大っ嫌いな香菜へ

間々えいよ

香菜と初めて出会ったのは留学先の台湾だったね。

スープの中にいた君が、私ののどを通る。

「！」

変な味がする。もう一口ゆっくり噛みしめていただく。

やはり変な味がする。

台湾人が香菜が嫌いかと聞いてきた。

香菜は色んな料理に入っているから気を付けて、と。

それから、君がいるか、いないか確かめながら食事をしたね。

でも日本に帰ってからは良かったよ。君を見かけなかったから。

するとどうだろう、昨今日本でも専門店ができるなど流行しだしたよ。

そして香菜、君が近所のスーパーにいたとき、私は君を叩き落そうと思わず長ネギを握りしめたよ。

君の名は中国語で「香（シャン）菜（ツァイ）」。

日本では君をパクチーと呼んでいるよ。

あぁ、君と初めて出会った瞬間。思い出しただけで吐き気がする。

なぜこんなまずい君を料理に入れるのか？

すると台湾人が言った。香菜を食べるとその独特な香りは汗と一緒に放出され、

蚊が寄ってこなくなる。だから君を沢山食べると、刺されないって。

なるほど、君にそんな効能があったのか。

でも、私にそんなことどうでもいいんだよ。どうでもね。

そして日本で「香菜（かな）」という人に出会ったとき、ちょっとびっくりしたよ。

君を思い出すからね。そうだよ、君が嫌いだから思い出したくもないんだよ。だ

からさようなら、二度と私の前に現れないで。さようなら香菜。

丘と少年

――神さまへの捧げもの

川口　修治

「ただ一度の愛の詩」

あなたの信ずるものを　ただ
心の内で深めなさい

あなたに与えられたものを通して
接する人の内に
愛として形作られるようになさい

「祈り」

心の奥深く
魂の住まうあたり
汚されることのない
私がそこにあって
（それは幼い私だ）
優しさと潔い思いで
私の全身をとらえる

主よ　欲望から離れ
あなたにふさわしく
ありたいと願います

一時の訪れではなく
いつも喜びのうちに
私をとらえてください

「出ておいで」

全身に針をまとい
風のそよぎ　草々のゆらぎ
土の湿り気　遠く行きかう者たちの
幽かな気配さえも
おまえは感じとっている

食べる営みも　過ぎ去る時間も
星々の運行も
あるかなきかの感情も
そして啓示さえも
針先に光の跡をとどめて
おまえを通り過ぎる

臆病なハリネズミは
丸くなって土の中にもぐりこむ

「ゆめ」

「どこにいるのか」
神さまが呼んだ
「ここです」
わたしは答える
「なにをしているのだ」
「星を見ています」
「知恵の木の実は　いらないのか」
神さまは誘う
「じゅうぶん　いただきました」
「では　そこにいるがよい」
「ごきげんよう」

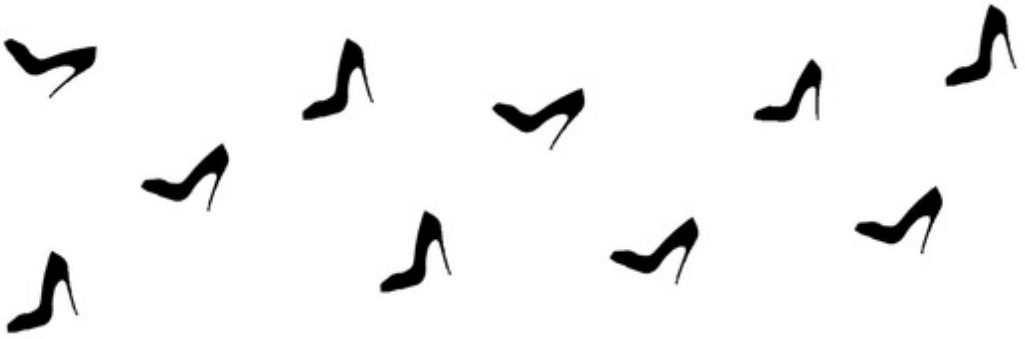
わたしは少し淋しかった

「応答」

一つの詩によっても
あなたは私を捉えます
私でいいのかなと思うのです
けれど　あなたが呼ばれますので
歩きだしましょう

もうこれ以上　自らの罪を
数えあげるのは　止めます

私と私の歌を捧げます
喜んで受け取ってくださいますか



ブロークンメモリーズ

一路 真実

その日、僕は学生の列に並び、小さなメモを手に順番を待っていた。

「佐藤稔。七十二番ってまだ行けます？」

受付台に身を乗り出すようにして言うと、事務員の女性は返事もしないまま、無表情で台帳を繰った。

「学生証」

その言葉に慌てて学生証を出すと、事務員は写しを取って僕の目の前に放り投げた。彼女は台帳に目を落としたまま、まるで静かなタイプライターのように機械的に電話番号を読み上げたので、僕は急いで机にあった鉛筆を走らせた。

学生の波をかき分けて扉を抜けると、頭の中の霧が晴れていくように、冷たい空気が鼻腔をすり抜けていく。僕はすぐに携帯電話を取り出し、先ほどメモした電話番号を押した。

「君も学セで見つけたんだ？」

通された小さな部屋には、屈強な肉体をした男子学生と切れ長の目で冷たく見つめる女子学生が座っていた。男子学生が日に焼けた顔に輝く歯を見せたので、僕もつられて笑みを浮かべて頷いた。

学生アルバイト斡旋センターは通称学セと呼ばれ、僕の大学だけでなく周辺の学生がアルバイトを探しに来る。日雇いのものが多く、一日頑張ればそれなりにまとまった金額が入るため、すぐにお金を必要としている学生に人気だ。

「さっき聞いたんだけどよ。今日はただ物を壊すだけの仕事らしいぜ」

「壊す？」

「そう。学セの斡旋は、パンの袋詰めとか封筒のシール貼りとか、物を作る仕事が多いから珍しいよな」

あまりにも人間的でない、機械を導入すれば済むような仕事ばかりで、同じ作業を延々と続けなければならない。気がつくと、自分が何者なのか存在を疑い始めてしまう仕事だ。

男子学生はヤマトと名乗り、盛り上がった胸筋の前で腕を組んで疑問を投げた。

「壊すだけで本当にあんな日給もらえるのかな？」

「割が良すぎるよな」
僕がそう言うと、ヤマトはにやついた。
「俺さ、調子にのってサークルの後輩に奢りまくってたら仕送りが底をついちゃってよ。朝早く学セに並んでよかったぜ」
ヤマトは、狭い室内に響くほどの大声で弾けるように笑うと、足を組みかえた。
「ミノルは何でバイト探してたの？　彼女の誕生日が近いとか？」
思わず言葉に詰まると、ヤマトは大げさな指揮者のように、太い指を宙に漂わせた。
「何買うんだよ？　靴か？　服？　バッグ？　何をねだられたんだよ」
「あ……いや……」
鬼の首を取ったような、矢継ぎ早の質問に僕は困ってしまった。初対面の人に話せるほど簡単な話ではなかったのだ。
「あんた、うるさいのよ」
それまで全く口を開かなかった女性が鋭い声を発した。ナイフで顔をすっと切られたような目をしていた。
「おい、アユミ。別にいいじゃんか。俺ら三人は今日から仲間なんだから。暗い女だな」
つんとして横を向いた彼女は、少し頬を染めたように見えた。おそらくヤマトは、僕が到着する前にアユミにも同じようにしつこく聞いたのだろう。そうやって人との距離をつめていくのがうまい男なのだ。
「仕事場に案内します」
そう言って入ってきた男は、黒いマントをまとっており、頭にトンガリ帽子を被っていた。背が高く痩せ型の男は、帽子でさらに大きくなり、扉をくぐるようにして出て行った。僕は密かにその男をトンガリと呼んだ。
トンガリは僕たちを引き連れて、地下への階段を降りて行った。あまりにも暗い螺旋状の階段を無言のままひたすらに降りていくさまは、まるで暗闇に半分溶け込んでいるトンガリの意識下にみんなで潜っていくようだった。
何段降りるのか不安になってきた頃、ようやく踊り場が現れ、トンガリは壁の扉をゆっくりと開けた。
薄暗い部屋は思ったよりも広く、目の前には一本のベルトコンベアーが右から左に走っていた。壁には貝のようなものがびっしりと生えており、まるで海の底に泳いで来たかのようだった。
「うへぇ、何だよ。この部屋」
ヤマトの言葉が静まり返った部屋に反響した。突然トンガリが振り返った。
「アンタ、ちょっとこっちに来てみろ」
ぴんと伸びた腕は矢のようで、指されたヤマトは顔を引きつらせて駆け寄った。
すると、ガコンと音を立ててベルトコンベアーが動き始めた。
「これで流れてきたものを壊すだけだ」
トンガリに渡された銀製のハンマーは重そうに見えたが、ヤマトはそれを軽々と振り上げると素振りをした。
「粉々にしちゃっていいっすか？」
こぶのように盛り上がる筋肉を躍動させるヤマトを一瞥すると、
「学生は破壊するのが得意だろう？」
トンガリは口の端を少し歪めて笑顔を

見せた。
　ベルトコンベアーは右奥の壁にぽっかり空いたトンネルに続いており、みんな固唾を飲んで暗闇の先を見つめていた。
　きらりと光るものが一つ流れてきた。
「ガラスの靴？」
　一番に反応したのは、アユミだった。それは透明なハイヒールの形をしたガラスだった。どんなに硬いものが出てくるのかと心配していた僕たちは、ほっと息をついた。
　ガラスの靴が目の前まで来ると、ヤマトはわざとらしくハンマーを大きく振りかぶって叩きつけた。ガシャンという音を立てて、靴は一瞬で単なるガラスの破片に変わってしまった。
「オイ、練習だ。交代してみろ」
　次はアユミだった。トンガリは、ヤマトのものより少しだけ小さなサイズのハンマーをアユミに手渡した。同じように、ガシャンとガラスの靴が壊れた。
「次は、キミ」
　呼ばれた僕は、ガコンガコンと動くベルトコンベアーの前に恐る恐る立った。あまりにも古びたベルトコンベアーは、赤サビがびっしりと付いており、まるで血を流しているように思えた。トンガリから受け取ったハンマーはずっしりと重く、僕の腕には負荷がかかり過ぎる。ガラスを壊すだけなのに何でこんなに重い必要があるのかと思ったが、みんなと同じように僕もガラスの靴を目がけて振り下ろした。
「あっ」
　焦って振り下ろし、前のめり過ぎて靴のかかと部分が残ってしまった。いつもそうだ。大事なところでミスしてしまう。自分も周りと同じようにできると勘違いして失敗するのだ。
「キミは下手だな」
　トンガリはそう小さく呟いたが、今度は大きな声で他の二人にも聞こえるように言った。
「少しぐらい残ったって構わない。半分壊せば目的は達成される」
　その後も、僕たちは順番に呼ばれた。
「アンタ、こっちに来い」
「オイ、交代だ」
「キミ、今度は狙いを定めろ」
　練習を重ね、僕もようやくガラスの靴を粉々に割ることができるようになった。その頃には、僕はある規則性に気づいていた。トンガリは僕たちのことを「アンタ」「オイ」「キミ」と明確に呼び分け、けして名前では呼ばない。それはまるで名前などいらないと言われているようだった。学生は破壊するのが得意だなんて、何を思ってトンガリがそう言ったのかわからないけれど、その言い方はまるで学生は何も考えずに無邪気に反抗する生き物だとでも言いたげであった。トンガリにとって、僕たちはただアルバイトを探してきた学生という記号でしかないのだ。
「もう昼だ。食事にしよう」
　トンガリは止まったベルトコンベアーをまたぎ、トンネルの奥に消えて行った。
「仕事は楽勝で高額報酬。しかも食事付きなんて、最高のバイトだな」
　ヤマトが言うと、アユミも口を開いた。

「何か裏があるのかもしれないわ」
「裏って何？」
驚いた僕の顔をすごく呆れたような表情で眺めると、アユミは切れ長の目をさらに細めた。
「だって、こんな単純な仕事に三人もバイトを雇うなんて変でしょう。本当は他にさせたい仕事があるとか」
「他にって何？」
アユミは溜息を吐いた。
「誰かが答えを言ってくれるのを待つんじゃなくて、少しは自分の頭で考えなさいよ」
トンガリが戻ってくると、いつの間にか食卓の準備が整っており、三つの平皿が並べられていた。その上には、何かどろどろとしたものがかかった素麺のようなものが載っていた。
「見た目はひどく悪いが味は良い」
トンガリが言うと、ヤマトはすぐに箸をつけた。
「本当だ、うまいぞ。食べろよ」
言われるがまま、僕も一口食べた。見た目からは想像のできない、食欲をそそるような匂いと深みのある味わいが口の中に広がる。
「食べてるのか吐いてるのかわからない料理だわ」
アユミはそう批判しながらも、無表情のまま次々に口へ運んでいった。

仕事を再開し、またヤマトから順に交代しながら流れてくるガラスの靴を壊し続けた。
「楽勝だぜ」
ヤマトは相変わらずこの仕事を肯定的に捉えていたが、僕はいつものようにじわじわと闇の淵に立たされ始めていた。
このガラスの靴は何のために作られたものなのだろう。なぜ壊されなくてはならないのだろう。別に不良品というわけでもなさそうなのに。
こういう疑問が出てくるとうまく仕事をこなせなくなる。しかし、疑問が疑問を呼ぶように、次から次に暗い湖から溢れ出てくる疑問が止まらなくなった。

「そういうの、もうやめて」
思考を突然遮るように、聞いたことのない女性の声がした。
「気持ち悪いのよ」
顔を上げると、目の前に見知らぬ風景とこちらを怒りのまなざしで見つめる女性の顔が現れた。薄暗かった部屋が様変わりし、突然に映画の上映が始まったようだった。隣にいたアユミも顔を上げ、驚いた表情で同じ映像を見ていた。
まるで過去を思い出すように、今までの世界から誰かの記憶の中に放り込まれたようだった。
「これ、返すわ」
ショートカットの女性は、手紙の束のようなものを突き返してきた。去って行く途中で急に立ち止まると、セーラー服のプリーツスカートを揺らしてきびすを返した。
「余計なお世話かもしれないけど、性格変えないと、これから生きていけないよ。ヤマト」
「うわあああああっ」

ヤマトが急に叫び、ハンマーを放り出して崩れ落ちた。ヤマトの前には、ベルトコンベアーで運ばれてきたガラスの靴があり、そのガラスから映像が放射されているようだった。

「靴を壊すんだ。そうすれば、この記憶は永久になくなる」

トンガリが言うと、ヤマトは床に突っ伏したまま泣き叫んだ。

「できないよ！」

「どうして。この記憶はアンタのトラウマなんだろう？」

「トラウマだけど、瀬戸さんがいたから俺は今の俺になれたんだ」

高校時代までのヤマトは、今の姿からは想像がつかないほどにおとなしく、友人と呼べるような人は一人もいなかった。同じクラスの瀬戸さんに好意を抱いたが、話しかけることもできず、いつか気づいてほしいと無記名の恋文を瀬戸さんの机の中に入れ続けた。瀬戸さんが家に帰り着くまで遠くから見届けるのが日課で、休日や長い休み期間も、瀬戸さんが何をしているか、どこへ出かけるのか家の前でずっと見張っていた。そんなヤマトの行動を知った瀬戸さんは、先ほどの映像の言葉をかけたのだとヤマトは語った。

「あれがなかったら、俺はずっとあの町にこもりきりで、瀬戸さんを追いかけ続けたと思う。思い出したくないけど、でも消すわけにはいかない大事な記憶なんだ」

ヤマトはガラスの靴を胸に抱きしめた。ぷつんとケーブルが切れたように、辺りは元の深海に似た薄暗い部屋に戻っていた。そして、どこからともなくトンガリと同じ格好をした男が出てきて、ヤマトの脇を抱えるようにして連れて行った。

「何なのよ、これ」

アユミが両手を握りしめて、トンガリに向かった。トンガリは気にもかけない様子で、黒いコートの裾を払った。

「ただ、流れてきたものを壊すだけだ。それしか求めていない」

またベルトコンベアーが動き出すと、靴が流れてきた。アユミの前に来ると、突風が吹いたように古い映像が辺り一面を覆い尽くした。

風の強い日のようだった。たくさんの男子に囲まれ、アユミは逃げ場を失っていた。

アユミの鼓動やその時の気持ちが僕にも流れ込んでくる。怖い、逃げないと。追い立てられ、心臓が苦しくなる。

「逃げられるわけないだろ」

「お前、顔押さえろ」

小学生のはしゃぐ息づかいと脅すような声がする。逃げられないように、両腕をつかまれ引きずり倒された。もみ合ううちに、めくり上がるスカートから出た膝に土がつく。

子どもたちの手にはコオロギが握られていた。手がどんどん大きくなってくる。

「やめて！」

アユミが大きな声を出し、ハンマーを手に取った。迷いなく靴をめがけて振り下ろし、ガラスの破片が飛び散った。

同時に映像は跡形もなく消え去り、元の静けさが戻ってきた。アユミの肩が上下していた。僕はアユミの顔を見ること

ができず、ただその荒い吐息を聞いていた。
「次はキミだ」
トンガリに言われるままに、ハンマーを手に取るとずっしりとした重たさが腕に伝わる。
トンネルの向こうから靴が流れてきたと思った瞬間、僕はカフェのオープンテラス席に座っていた。辺りを見回しても、ハンマーはおろか、トンガリやアユミの姿も見えなかった。
「椅子を一つもらってもいいですか？」
背中から声をかけられ振り向くと、カップを手にしたモエが立っていた。
「えっ、ミノル？」
「なんでここに……」
その瞬間、僕は全てを理解した。この後、奴が来るのだと。
「モエ、どうした？」
思ったとおりに、スーツの男が後ろから同じカップを手に現れた。モエは一瞬だけ僕の顔色を伺った。
「ああ、こいつが」
男は納得したようにうなずくと、モエの腰に手を伸ばして引き寄せた。
「……誰なんだよ」
ようやく僕が一声発すると、モエはびくりと体を震わせた。
「説明する必要もないと思うけど。モエがインターンで来た会社の社員だよ」
「お前に聞いてない」
「モエ、言ってただろ。こいつは金がないから一緒にいてもつまんないって。ほら、もう行こう」
お金がないなんて、学生なんだから当たり前だろ。そう思ったけれど言えなかった。モエがその言葉に反応するように、男に身を寄せたのだ。
「ミノル、ごめん」
モエはそのまま男と一緒にテラスを抜け、店の前に止まっていた、黒光りするレクサスに乗り込んだ。ターンして加速するさまは、まるで大きなシャークのようだった。
茫然としていると、突然トンガリの声が響いた。
「さあ、壊すんだ。壊せばこの記憶は永久にキミの中から消え去る」
つい数週間前の出来事で、その後も何度も何度も思い返しては辛い気持ちになっていたにも関わらず、今もう一度記憶をなぞっていくと僕の中に生まれた感情は以前とは異なるものだった。
モエは僕のことを哀れんだような眼差しをしたと思っていた。その顔が忘れられず、金があればモエが戻ってくるのではと、すぐに学セでアルバイトを探して無我夢中で働いた。
でも、もう一度見たモエは違っていた。寂しそうだった。大学もさぼってばかりで、アルバイトもせず、だらだら過ごしている不甲斐ない僕から離れずにはいられない状況を悲しむようにも思えた。
ふとモエと付き合ってきた楽しい日々が頭をよぎった。モエが前より幸せであればそれでいい。ぎゅっとつぶった目を開けると、目の前に靴があった。
「さようなら」
僕は思いきりハンマーで打ちつけた。

小さなガラスが辺りに散らばり、虹が閉じ込められたように光り輝いていた。
「大丈夫？」
アユミがそう声をかけてきたけれど、僕はもう何も思い出せなかった。何の記憶を壊したのか、それさえも全くわからなくなっていた。
その後も、アユミと僕は流れてくる靴を壊し続けた。記憶の中には、辛く思い出したくもないものもあれば、記憶の彼方に忘れ去っていたものもあり、何度も追体験しながらただひたすら自分の記憶を消していった。
互いの記憶を経験し、もうハンマーをふり上げるのさえ難しいほどにへとへとになっていた。辛い思いを二倍経験し、一つの記憶が消えても、一方の心には残る。アユミとは、記憶を交換するかのように作業を続けた。
いつになったら終わるのだろう。どのくらいの記憶をなくしたのだろう。僕の中には、今どんな記憶が残っているのだろう。脳の中の暗闇が僕を飲み込もうと口を開けて待っているようだった。記憶が全部消えたら、その後に何が残るのだろう――。
次はアユミの番だったけれど、アユミは疲労で床に座り込んだまま、動けなくなっていた。多くの記憶を失い、呆けたような顔をしたまま、肩で息をしていた。
深海のような部屋がいつの間にか暗い和室に変わっていた。がさっと物が落ちるような音に驚き、音の方向をじっと見る。怖かった。電気をつけようと手を伸ばすが届かない。アユミの幼い頃なのだ。
お腹がすいた。畳に横になっていると、玄関のドアから漏れた一筋の光が部屋にちらついた。
ぱっと電気がつくと、派手な格好をした女性が仁王立ちしていた。
「……おかあさん」
駆け寄ろうとすると、平手打ちが飛んできて、一瞬のうちにまた畳に逆戻りした。
「早く寝ろって言っただろ！」
胸ぐらをつかまれ、また頬を張られた。
「ごめんなさい、ごめんなさい」
じんじんとする痛みが全身を駆け抜ける。体の至るところに斑点のようなあざがあった。日常的に暴力を受け続けているのだ。
「もうやめろよ」
後ろから若い男がそう言ったが、母親はやめなかった。
「黙ってて！　この子は私の子なのよ。私がしつけなきゃいけないんだから」
母親の背後で、男は冷蔵庫から缶ビールを取り出すと喉を鳴らして飲み始めた。アユミは頬を殴られ、頭を畳に押しつけられると鼻血で母親の服を汚した。
「この服、高かったのよ！」
目の前の景色が揺れ続け、痛みに耐えながら早く終わってと願っていた。
僕は辛かった。幼児のアユミの記憶から流れ込んでくる心と体の痛みに我慢できなくなってきた頃、座り込んでいたアユミがゆっくり動き始めた。
「もう、無理……」
ぽろぽろと涙を流しながら、アユミは

ガラスの靴に手を伸ばした。
「他のどの記憶がなくなっても構わない。でも、この記憶だけは消せないの」
僕はアユミのそばにしゃがみ込んだ。
「どうして？　こんなのひどいよ。虐待じゃないか」
「でも、お母さんの記憶はこれだけなの」
アユミは淡々と続けた。
「この後、児童相談所の人が来て、遠くの親戚の家に預けられることになったの。お母さんとは二度と会えなくなったのよ。唯一の記憶なの。消せるわけがないよ」
アユミが靴を取ろうとしたので、僕はハンマーを手にして振りかぶった。その瞬間、トンガリが僕の腕を押さえた。
「だめだ。他人の記憶を勝手に消してはいけない」
人間とは思えない怪力で、僕の手からハンマーが落ちた。その時、アユミが靴に手をかけ、部屋は元に戻った。一緒に戦ってきた同志は、僕の顔を見ないまま黒いマントの男に連れられて歩き出した。
「アユミ！」
そう叫んだけれど、彼女は一度も振り返らなかった。
「さあ、キミ。続けよう」
トンガリが言うと、ガラスの靴が現れた。僕は橋の上で、血まみれの小さな犬の死骸を抱えていた。一瞬で分かった。これは封印した記憶だ。呼吸がどんどん荒くなり、胸が苦しく息がうまく吐けない。
この犬は家でペットの飼えない僕のために、旅行に行く友達が僕を信じて預けたものだった。散歩中にリードが外れ、車道に走り出した犬は自動車にはねられた。
正直に話そうと思ったけれど、頭の中で練習すると過呼吸になった。どうやって隠せばいいか、もうそれしか考えられなくなった。筆箱からカッターを取り出し、犬の体をばらばらにして隠そうと決めた。でも、皮膚を傷つけただけでうまくいかず、結局橋から川へ犬を放り投げた。
僕は、誰かに正しい道を教えてもらわなければ、ずっと横道にそれ続ける人間だ。疑問を感じても、自分では一番の答えを選び取ることができない。過去から逃げてきた僕にできることは、靴を壊すことしかないのだ。僕は、もう迷わなかった。
いろいろな記憶が、泡のようにぶくぶくと沸いては消えた。家族も、大切な人も、友達も。良い思い出も、嫌な記憶も、全てなくした。自分の手で、捨ててしまった。
しかし、思い出せなくなったら、大事なことなんて一つもなかったように思えた。
トンガリが僕の耳元で静かに呟いた。
「合格だ。キミには、これから新しい仕事をしてもらう」

それからというもの、僕は長い棒を手に、トンガリと同じ帽子を被って黒いマントを羽織り、街を歩いた。棒の先にある火を、街灯の中のオイルに点火し、一つずつ灯していく。それが僕に与えられた仕事だった。
街では僕を気にするものは誰もいなく、誰かに感謝されるわけでもない。僕はただ、時間になると人々の生活に明かりを与える。
僕は完全に、日常に溶け込んだ。

（了）

編集後記

編集後記

一路 真実

今回の小説、実は就活が裏テーマでした。そう思って読むと、何か心に残ることもあるかも？しれません。今年は星屑書房十年の記念イヤーです！

間々えいよ

犬神家の一族の犯人は・・・・読んでみてください。市川崑監督の映画もおすすめです。あの音楽がかかると、金田一という感じがします。

松田 定幸

冬星座モチーフの動物イラストは、今号にて一応完結です。次号からは、星を絡めた動物画のシリーズを、新たにリリースする予定です。

川口 修治

十数年前にノートに書き溜めた詩です。既発表のものもありますが、詩編として連載します。

衣 空

今年は年明けから面白そうな映画が多く時間の確保がとても難しいです。そんな風に言えるのは幸せです。

天沼 太郎

今回は、この四月にあったピリスの演奏会を書きました。たぶん何十年後も語りたくなる素晴らしい演奏会の思い出です。

甲斐 聖子

かいしょうこ　と、もうします。詩を書いていきます。よろしくお願いします。

紫雲 夜想

はじめまして。紫雲夜想（しうん　やそう）と申します。絶賛デビルズラインにハマり中です。小さい頃はマンガより小説を多く読んでおりましたので、右記のマンガを寝るが寝るまで読むことに罪悪感を覚える、今日この頃です。どうぞ、よろしくお願いします。

詠人不知

あの頃、こんな世界が待ってるなんて思ってもみなかったよ。

長月 絵莉

二回目です。よろしくお願いいたします。

星屑書房は、好き勝手に表現を行う文化系サークルです。自己表現の場をつくっています。いつでもメンバー募集中☆ワークショップ「表現のまなび屋」の参加者も募集しています！気軽にお問合せください☆

星屑書房
STARDUST BOOKS

STARDUST SCHOOL
表現のまなび屋

紙芝居屋 庭月野誠也

公演情報

Seiya NIWATSUKINO

枕崎出身・博多在住、紙芝居屋の庭月野誠也といいます。2000年に、甥っ子をモデルに絵本を描き、文芸社から「出版してみませんか？」とお電話を頂きました。それ以来、絵本の読み聞かせを経て、紙芝居を作るようになり、現在は作品をデータ化し、プロジェクターやテレビを使った電子紙芝居を語っています。土地に眠る昔話やオリジナルの物語など、「教育」「癒し」「笑い」を軸にお話しています。

母校の小学校・近隣の幼稚園・中学校、障がい者施設など、季節ごとに地元鹿児島に帰り、鹿児島弁で紙芝居の公演をしています。
福岡では、カフェ・病院・学校・図書館・祭り・バーなどでも公演しています。
フランス公演も実施しました。
遠方でも近場でも、さまざまな場所で紙芝居の依頼を受け付けております。ご家庭などの出張紙芝居も大歓迎です。ぜひ、ご連絡ください。

niwatsukino@gmail.com
090-9599-3718
https://www.seiyaniwatsukino.com/

紙芝居

入場無料

6月17日（日）

15：00～16：00
福岡市児童会館（福岡市中央区今泉 1-19-22）
あいくる　6階共同スペース

6月24日（日）

14：00～15：00 喫茶 kotomako

【表現のまなび屋】一路真実の小説ゼミのご案内

STARDUST SCHOOL 表現のまなび屋

星屑書房は、誰でもが表現活動に親しめるようなワークショップ「表現のまなび屋」を開催しています。小説ゼミは、小説等を書いている人同士で意見や感想を話し合い、伝わる文章を書くために互いに学び合う講座です。

日時：平成３０年７月２８日（土）　19:00～21:00（18:30 受付開始）
場所：福岡市ＮＰＯ・ボランティア交流センター　あすみん
　　会議室（福岡市中央区今泉 1-19-22 天神クラス 4 階）
参加費：500 円（要申込）
　　※詳細は星屑書房のホームページでご確認ください。

★special thanks★創星配布協力店等のご紹介
ジュンク堂書店福岡店、福岡市東図書館、宮若市立図書館、Ambient、Cafe & Gallery　フッフール、FREHAKO!、MOOK、６次元、ONLY FREE PAPER、ヴィレッジヴァンガード津田沼パルコ店、星時、只本屋、はちみつとフリーペーパーのお店『はっち』、MUJI BOOKS 岡山ロッツ店、くまもと森都心プラザ図書館、大分の雑貨屋 CochoCocho（まちかど出版ぽえまるブース）　※お店等に置かれていない場合は、星屑書房へお問合せください。

創星　第 17 号

2018 年 5 月 27 日　初版

発行元　星屑書房

https://stardustbooks.jimdo.com/

©2018 STARDUST BOOKS, Printed in Japan.
本書を無許可で複写・複製することは，著作権法上での例外を除き，禁じられています。

星屑書房
STARDUST BOOKS